『茜雲』

Ｓさんは元高校教師で、定年後は書道教室を開いていた。ある時、肺癌の診断を受けたが、その時は既に全身に転移していた。肺に水が溜まっていたため、胸に太い管を入れて４～５リットルほどの水を抜いた後、抗がん剤が注入されたが、背中の痛みや発熱がみられ、酸素吸入も必要な状態となってしまった。病状が思わしくない中、Ｓさんはホスピスへの入院を希望し、診断されてからちょうど１ヶ月後に私たちの病院に来られた。私が福岡の栄光病院に勤めている時のことである。

入院した時のＳさんは痛みや息切れがあるのに、病室を訪れた私たちを素敵な笑顔で迎え入れてくれた。妻は敬虔なクリスチャンで、Ｓさん自身も一緒に教会に通っていたそうだが、ホスピスに入院する直前に自分も洗礼を受けて来たことを教えてくれた。発病して急速に病状が進行し、並みの人間であれば、その事実となかなか向き合うことができないであろうが、Ｓさんは穏やかな口調で「10 年前にキリスト教と出会い、病気になってから 10 日ほど前に洗礼を受けました。そのためか、不思議と病気の事を冷静に、穏やかな気持ちで受け止められるんです。その事に感謝しています。」と今の心境を話してくれた。本当に穏やかな表情であった。

入院後は薬や点滴で痛みや熱が落ち着き、1 週間ほどは穏やかな日々を過ごしておられたが、入院 10 日目に咳が激しくなり、一時、大量の酸素吸入を必要とした。点滴治療などで、何とか症状は落ち着いたが、以後Ｓさんはより死を意識するようになったのか、それを正面から受け止めようとしている思いが私たちにも伝わってきた。

Ｓさんは、発病直後、出会いの頃からの振り返りを原稿用紙 80 枚くらいに書いて妻に渡したとの事であったが、入院中も事あるごとに妻への感謝の気持ちを話していた。私たちスタッフにはいつも変わらぬ笑顔を見せ、「好きな言葉を言ってごらん」と問いかけ、答が返ってきた後、用意していた色紙に得意の筆でその言葉を力強く書いて１人１人に渡してくれた。私は「夢」という言葉をお願いした。Ｓさんのひと筆は力強さだけでなく、温かいこころが伝わるものであった。

残念ながら病状は確実に悪くなっていた。いつしか身体のむくみも目立ち、お別れが近づいているように感じた。そんなＳさんは私たちに言葉を書いてくださる他にも空いた時間にはいつも筆を取り、何かを書きしたためていた。実は発病してから、ずっと自分の心境を短歌にして書き綴っていたそうである。その短歌はいつしか 130 首ほどにまでなり、妻とお二人の娘さんの計らいで、一冊の短歌集が出版された。タイトルは「茜雲～病の床より」。それはご家族からＳさんへの最後のプレゼントになった。入院して 29 日目、

出版のお祝いを病室で執り行った。Ｓさんにとっては既に声を出すことも重労働であったが、ご家族やスタッフへの感謝の気持ちと、出版の喜びの気持ちを丁寧に話してくれた。その後皆でお茶で乾杯し、喜びを分かち合った。残念ながら、この日の晩、Ｓさんの呼吸状態は急激に悪化し、翌日の夜、入院されて 30 日目にご家族に見守られる中、帰らぬ人となった。

「茜雲～病の床より」は、この歌から始まっている。
『これからをどう生きるかが人生のスタートならんとひとりしおもう（癌告知）』

がん告知を受け、大きな衝撃を受けながらもそれを受け入れていこうというＳさんの決意のようなものを感じる。そして、その後も、置かれた状況をご家族と共に涙しながら支え合い、乗り越え、さらに信仰と出会うことで今は穏やかな気持ちで坦坦と最後の時を待つ。そんな、その時々の心境を歌で表現されていた。そこからは心穏やかな気持ちに至るまでのさまざまな苦悩も伺われた。Ｓさんは、その色々な気持ちを歌にすることで事実を受け止め、この世との別れの準備をしていかれたのだと思う。
Ｓさんから頂いた「夢」の色紙は今でも大切に持っている。そして何より、大変な状況の中、私たちに見せてくれた優しい笑顔が今でもこころの中に残っている。

「茜雲～病の床より」一部抜粋

これからをどう生きるかが人生のスタートならんとひとりしおもう（癌告知）

妻や子が我の病をいやさんとくだきし心に涙とまらず

「告知」なき以前の自然な心もて書にはげみなむ神召す日まで

坦々と唯坦々と坦々と死をば迎えむ心無にして

死の予感前より深く感じても有難き日々を真に感謝す

人生の波のりこえて我は今静かな港に憩いて歌う

（平成 23 年 1 月 16 日　著）